

現代の写実の 考え方について

砂 田 友 治

近代以降の絵画に表われた形や色が、日常的視覚経験とひどく離れた様に見えるのです。

所がそこに最も近代的な写実の性格が出ております。その出発はセザンヌの晩期の、一見濁った色や非合理的な形に求められます。だから理由のある事です。之について、簡単でまず私の説明をさせて貰います。

一つは対象とか自然そのものが変つて来ていることです。言葉を変えれば対象の捉え方が異なり事です。クールベや印象派が経験した自然や果物や人物は外形的には今もあるでしょう。然しそれを視る現代の人の眼はもつと現実的であるということです。但し此の現実的ということは大変意味が深いので、私には云えない事です。恐らく人間の問題にもなります。人間の在り方がどうであるか。の理解は増々難しく、従つて一つの方程式で人間を説明することなど出来難いという事。而も説明と現実とは別の事が多いこと。現実の事象をガツチリと体でうけとめた経験の少ない私は。実は現代の生活に適応するだけでヘトヘトなので、何も云う資格はないわけです。人間とは正に不可思議絶妙なものであると云いたい。素材なヒューマニズム等何か魂の抜け殻みたいだと云つたら叱られるでしょうが、私は勿論之は発展の大胎動と考えます。自然や対象を視る眼は厳しく痛烈で乾き切っているかと思えば、もつと何かロマンチックな空想もする。然し常に焦点を絞り、問題を

捜し之をえぐり出し、烈しく訴えようとする態度もあります。自然はそのための素材にすぎなくなり、対象の取捨、組み立ても自由となる、だから日常経験の实在性としての空間の法則が変えられる結果ともなります。

もう一つは絵の造形意識や方法の発達でしょう。絵という芸術の表現形式の純化です。他の芸術のジャンルを侵さない、という意識。写実だからと云つてカメラのメカニズムのまねはしない。画面は区切られた有限のスペースだが、絵となればそれは一つの世界である。世界は精神と方法を持った独立体であつて、物の断片ではない。絵の中の形や色は此の世界の構成分子であつて、自然の外形や色彩がそのままに入れる訳はない。つまり、リクレート（再生）された形や色なのです。大胆な変形はその必要性があります。それから油えのぐという材料を方法的に随分マスターしたと考えます。此の粘っこいえのぐは仕末の悪い代物です。此の難物を自由に使う技術は、色彩の深い生命感の表現に効果があります。私は絵のフォルムはポリニウム（色の拡がりの事）だと考えています。点や線もポリニウムの変形です。

現代の写実には以上の二点をふまえて立つているのですが、その比重のかかり方や方向に依つては抽象的となり、幻想的となると思います。之だけ云つて私は変な気がしますが。芸術はこんなことではない。もつと物を見ることだ。強い感動と、之を支える物凄い力なのだ。



マツダ 油絵具と洋画材料

水彩、油 額縁 各種
写真、賞状

別寸法調製承ります

練習用油絵具	1組	¥300	480	600
函付材料一式セット		¥1,100	1,300	1,500
			1,900 ~ 3500	

札幌十字街 富貴堂 TEL ③195番
振替小樽 317番

ホルベイン